

第5回 テキスタイル [プロ] デザイン講座

教育研究部会 (関東)

- 講師：新井明子(あらい・あきこ)先生
- テーマ：「ファッションファブリックとは」
- 日時：9月21日(金) 午後6時～9時
- 場所：青山ウィメンズ・プラザ



月1回の予定で4月に始まった当講座も今回で5回目となった。今回は新井明子先生を講師にお迎えして左記のタイトルのもので行われた。

新井先生はテキスタイルデザイナーとしてプリント生地 of 企画、デザイン、製造販売を取り扱う「アコス・ファブリックハウス」を経営、ファッションファブリック及びバックからインテリア小物まで幅広い製品の企画、製造を手掛けられている。講座では企業の仕事及びご自分の会社の活動を語って下さったが、内容の要略は次の通りである。

◆ファッションについての考え

ファッションは時代の反映であり群れの中で自分を確認し、表現し快適に暮らすためのもの。見せつ見られつの世界の中でどう見せたいかを問い、摩擦の中でセンスを養う。

◆デザイナーの心構え

- ・衣類は手で作られていたものが産業革命以降分業となってしまうが「頭で考え、心に感じ、手で作る」ことが大事である。
- ・デザイン、色等の決定から製品が上がる迄の間に時間のずれが生ずるので「今」を絶えず分析、分類することが大事である。
- ・描けないものはコンピューターでとりこめないし、見ないものは描けない。物の装飾の原点は素朴な自然にあるので元のものに触れ、描写することが大事である。
- ・色彩感覚は美しいものを見ることでしか発達しない。何が美しく見えるか、新しいかをキャッチできるように目と心を絶えず養うことが必要である。
- ・自己トレーニングを怠らない。モードの中に身をおくことを心掛け、本、資料等に自己投資すること。
- ・布にさわる。色々な服の 카테고리を知る。
- ・生活感なくてファッションのデザインはできない。

◆今後に向けて何をすべきか

最近日本の織物工場が海外へ拠点を移しているがハードが外に出てしまうとソフトも衰退する。日本は今、何を発信すべきか、できるかを考えることが重要である。そのためには日本の文化を見つめ直し、自分の血をグローバルに生かすことを考える。そのことが次につながる。最後に残るのは個性であり従って心棒を軸に反応できる多様性を養うことが求められる。

以上を制作現場、布のパターン及び製品化された服等の膨大なスライドを交えながらエネルギッシュに語って下さった。学生時代にバラの花を300枚描いたという話が印象に残っている。とことん描くことでバラの様々な表情をとらえ、表現方法を身につけることができたという。又、ご持参のたくさんの服を受講者がそれぞれ着用してみたが、2～30年前の服が、今の若い人に新鮮にうつり似合っていた。そして模様は楽しい世界という思いを新たにされた。

(レポート 中野恵美子)